偽「モルガン」の背後に公家の末裔を名乗る天才詐欺師の影

偽モルガン登場

「石岡カントリー倶楽部の会社更生スポンサーに外資系のエフ・エヌ・エスモルガンが内定した」

昨年10月、こんなニュースがゴルフ関連メディアに流れた。石岡カントリー倶楽部はバブル崩壊後の94年、茨城県に「石岡ゴルフ倶楽部」を開業したが、主力銀行の長銀と日債銀が相次いで破綻したため債権がRCCに送られ、会社更生手続開始が申し立てられていた。外資による日本のゴルフ場買い漁りが話題になっていた時期だけに、「あのモルガン」が高級パブリックコースの石岡GCを買収したものと誰もが疑わなかった。

しかし筆者が調査したところでは、エフ・エヌ・エスモルガンは日本でよく知られている外資のモルガングループ、すなわちJPモルガンとモルガン・スタンレーのいずれともまったく関係がない。石岡GC買収の記事を書いた記者に問い合わせてみると、担当者は記者に「米国のモルガンファミリーの資産管理をしている」と称していたという。さらに調査してみると、この会社はあちこちで「モルガングループ」を自称する怪しい存在であることがわかった。

エフ・エヌ・エスモルガン（FNS）の登記上の本店は皇居を望む丸の内一丁目の東京銀行協会ビル12階にある。このフロアは共用のレンタルオフィスになっていて、オフィスサービス会社に電話転送を依頼すれば、社員が誰一人いなくても会社の体裁を作ることができる。調べると同じ場所にモルガントラスト・ジャパン（トラスト）という会社も存在した。

乗せられた外資

石岡ＧＣ買収に際してFNSは「びっくりするような金額」（管財人）の残高証明書を示して資金力を誇示したという。この残高証明書の信憑性に筆者は疑問を持っているが、それはともかくFNSは実際にはまったく資金を持っていなかった。そこで同社はすぐさま石岡GCの転売を画策する。転売先として目をつけられたのは外資系のゴールドマン・サックス（GS）と日興アントファクトリー（AF）だった。

GSに接触したのはFNS代表取締役の髙橋昭だ。GSはFNSに対するフィナンシャル・デューディリジェンスを行ったうえで全株を取得し、共同代表取締役を含む役員を送り込んでFNSを傘下に収めている。筆者の取材に対してGSは「FNSは裁判所から正式に石岡GCのスポンサーに選任されており、GSがスポンサーになるためにはFNSを管理下において再生計画終了後に清算するのがよいと考えた」としている。デューディリジェンス担当者も、FNSには不審な点はなかったと話す。しかしFNSは同時期、後述するように大盛工業（東証二部1844）子会社の増資引き受けをしていたのだ。このことはGS側はまったく知らなかったという。

いっぽうAFに接触したのはトラストのほうだった。交渉はトラスト取締役の柳沢博が行っている。柳沢はかつてロイヤルフラワーというベンチャー企業の経営者として名を馳せた人物で、ゴルフはシングルの腕前という。FNSの石岡GC再生プランにはティーチングプロのジェフ山口が名を連ねているが、これは柳沢の人脈だろう。ちなみに柳沢の妻も３月までFNSの取締役を務めていた。

AF側はマネージング・ディレクターの東明浩が個人的案件としてトラストの代表取締役に就任し、石岡GC再生のためのファンド組成を手がけているが、資金的に問題があることやトラストが大盛工業子会社に関係していることを知り、３月末に辞任している。ファンド組成が実現しなかったばかりか、怪しげな事業が進められていた当時代表取締役を務めていたことから、東は難しい立場に置かれることになった。

立﨑泰という男

偽モルガン人脈のなかで筆者がとくに興味を覚えるのは、トラスト前代表取締役で実質的経営者の立﨑泰（たちざきとおる）という人物だ。取材を進めた結果、立﨑のとんでもない素顔が浮かび上がってきた。

立﨑泰は希代の詐欺師として裏の世界では有名だった。公家の末裔と名乗り、数々の国宝級という美術品を所蔵しているうえ、ふだんから金色のベンツを乗り回しているという。途方もなく怪しい人物だが、儲け話を持ち込んで優良企業を事実上乗っ取り、横領を繰り返したうえで企業を再起不能にして逃げるという詐欺の腕前は一流とおそれられている。

立﨑が乗っ取った企業は数多いが、ごく最近餌食になったのがインターネット映像配信で知られるア

クティビジョン（小野寺隆社長）だ。立﨑はNHKに太いパイプがあると称してアクティビジョンの「会長」に納まり、文部科学省の外郭団体とNHK関連会社が共同で手がける教育番組の衛星・ネット配信事業を進めている。その過程で経理担当者を追い出して腹心を後任に据え、莫大な金額の横領を繰り返したのだ。立﨑が入り込んでからの使途不明金の額は1年9か月で4億円にのぼるという。

筆者が入手した内部資料からは、半年たらずの期間に計約5000万円の架空請求書が作られ、金は立﨑と元妻の個人口座や立﨑の経営する会社に送金されていたことがうかがえる。こうした多額の横領も、経理担当者の女性が立﨑の腹心（愛人という説もある）だったため、長く発覚することがなかった。会計監査に必要な残高証明書もすべて偽造されていたという。

今年6月、小野寺が不正に気付いたときには、メインバンクの口座にはわずか1700円ほどしか残っていなかったという。株式公開寸前まで行ったかつての優良企業とは思えない、まさに雑草1本生えない荒廃ぶりだ。

立﨑の手口の執拗さがいかんなく発揮されたのはここからだ。立﨑はアクティビジョンの取締役を昨年12月に退任しているが、その後も頻繁に会社に現れ「小野寺が金を着服した」という偽情報を流している。これを信じた一部の役員と社員は立﨑が取締役を務める新会社に移って残務処理を続けているが、そこでも給料や報酬は未払いのままで、立﨑とも連絡が取れない状態が続いているという。

小野寺は会社の財産も信用も失ったうえ、立﨑に横領の罪を着せられて現在潜伏中だ。筆者が取材したときも相当な精神的ダメージを受けている様子で、立﨑から危害を加えられることをおそれて心中穏やかでないと話していた。筆者は小野寺以外の過去の被害者からも話を聞こうとしたが、その多くが小野寺と同じような仕打ちを受けたようで、ひそかに転居して行方知れずという場合がほとんどだった。

終わりの始まり

あまりにも鮮やかな立﨑の手口だが、最近になって彼はひとつの重大な誤りを犯した。それは大盛工業の子会社が進める「携帯電話を定額にするアダプタ」事業への関与だ。大盛子会社のジャパンメディアネットワークが進めるこの事業に、偽モルガンは増資引受という形で加わった。立﨑が何を企んでいるかはいまのところわからないが、これが立﨑の悪事が表面化するきっかけとなった。

この事業は親会社の株価操作のために持ち出された架空事業と言われている。事業が発表されると同時に実現性を疑問視する声が上がり、インターネット掲示板「2ちゃんねる」では専門家による議論が繰り広げられた。筆者はこの掲示板に興味を覚えて議論に参加し、人脈を調査しているうちに立﨑の名前が浮かんだのだ。

立﨑泰という名前が掲示板に掲載されるや、たちまち彼の悪事に関する情報が集まった。筆者のところにも被害者からの告発が相次いだ。情報が瞬時に伝わるインターネットというメディアに直結したIT産業に狙いをつけたことが、立﨑の破滅を招くきっかけになったと言ってもよいだろう。

もうひとつ立﨑にとっての不運が起きた。立﨑はこれまで逃げる前に証拠書類をすべて湮滅し、被害者からの追及を免れてきたが、アクティビジョンの小野寺が危機一髪のところで証拠書類を持ち出したのだ。小野寺はこの証拠書類をすでに安全な複数の場所に保管し、これを材料に法的手段に訴える構えを見せている。

天才と言われた詐欺師立﨑泰だが、もはや逃げ道は残されていない。

(nemo)